

第8章 小樽市祝津の観光エリア

伊波 知恵

8.1 小樽市の概要

小樽市は古くから北海道有数の港湾都市として発展してきた。札幌市から約40kmの距離にあり、道路交通網では国道5号と札幌自動車道により約1時間で結ばれている。鉄道では札幌駅から約30分、新千歳空港から約70分の所要時間になっている。市内に100店舗以上を構える寿司の街として知られることなどから観光都市としても人気が高く、毎年700万人以上の観光客が訪れている。市町村の魅力度ランキング調査ではトップ10にランクインする都市になっている。

図8-1 交通インフラ整備



出所：北海道小樽市 企業立地のご案内

8.2 祝津エリアの観光地

8.2.1 にしん御殿 小樽貴賓館（旧青山別邸）

小樽貴賓館は、敷地内に旧青山別邸が位置しており、それぞれについて紹介していく。

図8-2 小樽貴賓館



出所：4Travel.jp

8.2.1.1 小樽貴賓館

お食事やお土産などを購入することができる。毎年5月下旬～6月下旬まで「牡丹まつり」を開催しており、庭では約400株の牡丹、芍薬の花が庭園を彩る。1階のホールでは、北海道ゆかりの日本画家による豪華な天井画の競演を見ることができる。

8.2.1.2 旧青山別邸

青山家は、明治・大正を通じ、鯁漁で巨万の富を築き上げた。二代目政吉と三代目娘夫婦民治・政恵が17歳の時、山形県酒田市にある本間邸に魅せられ1917年から六年半余りの歳月をかけ建てた別荘が旧青山別邸である。総工費は31万円である（当時、新宿の有名デ

パートの建築費が 50 万円ほど)。当時、鯨大尽と呼ばれた政吉は、美意識が高く、一流好みであった。その為元場とは違う芸術的な建築物を目指し完成させた。国が登録有形文化財（2010 年 11 月 1 日）に指定したことから、祝津が鯨漁で湧いていた時代に、お金に糸目をつけず贅をつくした豪邸は北海道屈指であることがわかる。

8.2.2 おたる水族館

1958 年 7 月に北海道博覧会の「海の会場」として建設され、1959 年に「小樽市立水族館」として営業を開始した。1974 年に新館（現 本館）竣工と共に第三セクター小樽水族館公社による経営となった。豊富な種類の魚介類を展示している本館、イルカ・オタリアのショーが楽しめるイルカスタジアム、アザラシ、セイウチ、トド、ペンギンなどが飼育されている海獣公園、遊園地「小樽祝津マリランド」で構成されている。海獣公園は自然の入り江を利用しており、海鳥も飛来している。海岸から野生のトドやゴマフアザラシが迷い込むことがあり、そのまま飼育される例もある。

営業期間は通常 3 月の春休み期間（以前は 4 月）から 11 月までだが、2006 年からは小樽雪あかりの路・さっぽろ雪まつりと連動した冬季営業も行っている。2011 年からは実質通年営業に切り替えた。「沖縄美ら海水族館」開業までは「東洋有数のスケール」をキャッチフレーズにしていた。

施設は、本館・別館・怪獣公園に分かれており、以下では、特に魅力的な展示を紹介する。

8.2.2.1 本館

北海道と寒帯に生息する魚類を中心に 62 個の水槽を使い、約 250 種類 5000 点が展示されている。ウミガメ・クリオネ等も飼育展示されている。

① ネズミイルカのほのぼのプール

北海道沿岸に生息する小型の鯨類で、学術研究目的以外には生体での保持が禁止されており、飼育展示している施設がとても少なく、複数での飼育展示は日本では当館のみである。当館では北海道大学水産科学研究院と共同で、定置網に迷い込んでしまった個体を保護し、その生態や習性などを研究している。

世界最長飼育記録をもつ「次郎吉」は、1984 年寿都町で定置網にかかっていたところを保護された個体であり、以後水族館にて暮らし、高齢となってから視力がほとんどなかったが、2008 年 3 月 25 日まで生存した。推定 24 歳とされる。

図 8-3 おたる水族館



秋野撮影

② 北海道の希少生物

おたる水族館では、絶滅の危機に瀕している生物の保護や研究に取り組んでいる。なかでもキタサンショウウオとエゾトミヨは繁殖賞を受賞している。

表 8-1 おたる水族館で飼育している希少生物

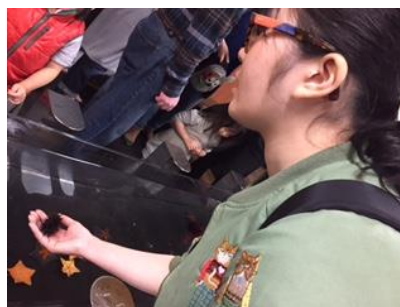
キタサンショウウオ (準絶滅危惧種)  日本では釧路湿原にしか生息せず、釧路市と標茶町の天然記念物に指定されている。	オショロコマ (絶滅危惧Ⅱ類)  日本では北海道のみに生息するイwanaに近い仲間である。	エゾトミヨ (絶滅危惧Ⅱ類)  産卵期にオスが巣作りをし、卵がふ化するまで世話をする魚である。
エゾホトケドジョウ (絶滅危惧ⅠB類)  普通のドジョウはヒゲが10本あるが、エゾホトケドジョウは8本しかないという特徴を持つ。	ニホンザリガニ (絶滅危惧Ⅱ類)  日本固有種だが、生息地の開発と水質汚染により個体数は激減している。	

おたる水族館 HP より筆者作成

③ 日本一冷たいタッチプール

さわって E zone というブースでは、ヒトデやナマコなどを実際に触ることができる。その水温はマイナス3度で、真冬の小樽の海水温と同じである。冷たい海水に手を入れることで、北海道でたくましく生きる生物たちを実感することができる。

図 8-4 秋野の手に乗るナマコ



筆者撮影

8.2.2.2 別館

① ペリ館

夏季はモモイロペリカンが飼育展示（冬季は本館に移動）、冬季は海獣公園のペンギンが展示されている。

② イルカスタジアム

バンドウイルカとオタリアとセイウチのショーが催されている。

8.2.2.3 海獣公園

海獣、鳥類等 13 種約 150 点を展示しており、夏季のみ公開され、冬季間は閉鎖される。

① アザラシショー

普段は自然の海を仕切って作られたプールで展示しているため、魚やタコ、カニも自然の海と同じように住んでいる。そのため、生き生きとしたアザラシの姿を目にすることができる。

日本近海には 5 種類のアザラシが生息している。このうちクラカケアザラシを除く、4 種類のアザラシ達を飼育展示し、アザラシだけでも飼育頭数 50 頭を超え、この数は断トツで日本一である。ほぼ毎年のようにゴマフアザラシが出産するだけでなく、ワモンアザラシの繁殖に世界で初めて成功した実績がある。享年 46 歳のゼニガタアザラシや同 43 歳のゴマフアザラシを飼育展示していたこともあり、この 2 頭は未だ国内最長寿記録（2016 年 8 月現在）である。

図 8-5 アザラシショー

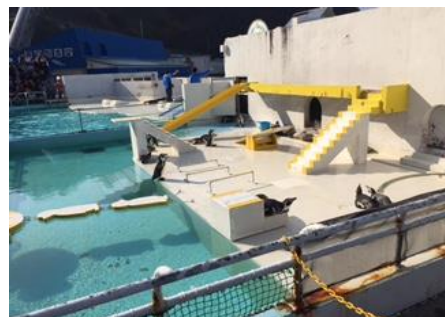


出所：おたる水族館

② ペンギンショー

動物がトレーナーの指示どおり行動することだけがショーではなく、このペンギンショーは、ペンギンの自由さが魅力である。ショーの時間でもほとんどが自分の好きなことをし、食欲はあるがやる気はなく、ショーを始めるとバラバラに散り、ショーが終わると集まる。指示に従うことは滅多にないため、ときどき種目をこなすと、まさに貴重な一瞬に出会った気分を得ることができる。

図 8-6 ペンギンショー



筆者撮影

野生のフンボルトペンギンは、絶滅の危機に瀕しており、原因は、自然破壊や地球温暖化による生息環境の変化の影響だといわれている。その一方で、日本の水族館や動物園ではよくみられる種類で、繁殖もしている。

8.2.3 小樽市鯨御殿（鯨番屋）「旧田中福松邸」

鯨御殿とは、第二次世界大戦前、とりわけ大戦景気までの時期に、北海道の日本海沿岸で隆盛を極めた鯨漁で財を成した網元達が、競って造った木造建築物である。

「鯨御殿」の定義は未だ確定されておらず、明治期から大正 12 年頃までにかけて建築された網元の家屋程度の目安で紹介されている。

旧田中福松邸では、当時の鯨業に関する写真が展示されている。そこには浜辺に打ち上げられた大量の鯨、廊下に入りきらない鯨が写っており、その大魚ぶりは思わず目が釘付けになるほどである。

昔の衣装を着て写真撮影をすることが可能であるブースも設けられており、当時の人々の雰囲気を味わうことができる。

図 8-7 旧田中福松邸



出所：Travel.jp

8.2.4 歴史的建造物

小樽市は北海道では古い歴史を有しており、慶長年間には松前藩あきんぼの商場が置かれていたとしている。明治になり蝦夷地を北海道と改めて本府を札幌に定めると、海の玄関口である小樽に人や物が集まるようになった。1880 年には北海道内初となる鉄道が手宮～札幌間に開通し、小樽港は道内各地への開拓民の上陸や物資陸揚げの港となり、昭和初期にかけて金融機関や船舶会社、商社などが進出して北海道経済の中心都市として発展した。

戦後、鯨漁の不漁や樺太の喪失、石炭需要の減少、道内他都市の港湾施設整備などによる卸商が衰退し、札幌市が北海道の中心都市として発展すると小樽市は衰退の一途を辿るようになる。「運河論争」を機に明治後期から昭和初期にかけての歴史的建造物を観光資源として見直し、観光都市として脚光を浴びるようになった。建築用途としては漁家、倉庫、店舗、料亭、寺院、教会、銀行など多種多様となっており、これらの建物には当時の最先端の技術や洗練されたデザインが施され、優れた文化遺産である「小樽市指定歴史的建造物」として高く評価されている。

代表的なのは、「北のウォール街（色内通り）」であり、かつて小樽が国際的な港湾都市として栄えていた頃に、大半の主要銀行が支店を開設していました。

祝津には、指定された 84 号のうち、第 58 号「恵美須神社本殿」・第 62 号「白鳥家番屋」の 2 つが登録されている。

表 8-2 祝津の歴史的建造物

第 58 号 恵美須神社本殿 	祝津海岸の段丘上にあり、本殿は覆堂に収められている。本殿の棟札に文久 3 年（1863 年）の建立とある。妻飾りに笈形付き太瓶束を設けるなど、この時期北海道で建築された一間社流造り神社本殿に共通する特色を持っている。なお、拝殿、幣殿、覆堂は 1928～1930 年にかけて建築されたものである。境内には、小樽市の保存樹木に指定されているクワとイチイとがある。
第 62 号 白鳥番屋 	祝津は、北海道の初期漁村集落の様子を伝える貴重な地区であり、海岸沿いに鯨漁家の住宅、番屋、倉庫などが建ち並び、丘には神社がある。旧白鳥家番屋は 1887 年頃に建てられ、主人と漁夫の住居部分が大屋根で一体になっている。主人のすまいには、床の間や欄間を設け和風住宅の特徴を示す。漁夫の寝床は、吹き抜けに巡らされていた。大工は、大棟梁が小林秀作、脇棟梁が土門倉次であり、1995 年に建物の補修工事が行われ、翌年、小樽市都市景観賞を受賞している。

出所：小樽市 HP より筆者作成

8.2.5 祝津マリーナ

マリーナとはヨットや小型船を泊めておく、小さな港や水域のことである。

祝津マリーナは国定公園の自然豊かな場所に立地している。祝津マリーナまでの「札幌からの陸路」と、釣りポイントまでの「マリーナからの海路」が程よい立地条件であり、そのためコストも安価である。小型ボートでもマリーナから 5 哩圏内に沢山の船釣りポイントが展開するため、急激な天候変化にも即時帰港対応できる安心・安全な場所に位置している。ボートはレンタルでき、所有船の GPS には数々の釣りポイントが搭載されている。

図 8-8 ボート



出所：小樽祝津マリーナ HP

参照 HP

- ・ Wikipedia

「おたる水族館」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8A%E3%81%9F%E3%82%8B%E6%B0%B4%E6%97%8F%E9%A4%A8>

「小樽市」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E6%A8%BD%E5%B8%82>

- ・ 小樽市 企業立地のご案内

<http://www.city.otaru.lg.jp/kigyoritti/>

- ・ 小樽市 HP

<https://www.city.otaru.lg.jp/>

- ・ 小樽祝津マリーナ HP

<http://www.shukutsumarina.co.jp/>

- ・ 小樽ジャーナル HP

<http://otaru-journal.com/2008/03/post-2385.php>

- ・ おたる水族館 HP

<http://otaru-aq.jp/>

- ・ 小樽の歴史スポット

<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Sumire/8209/otaru.htm>

- ・ Travel.jp

<http://guide.travel.co.jp/article/6087/>

- ・ にしん御殿 小樽貴賓館（旧青山別邸）

<http://www.otaru-kihinkan.jp/>

- ・ 4Travel.jp

<http://4travel.jp/domestic/area/hokkaido/hokkaido/otaru/otaru/hotplace/10004542/>